# 大学院時代の思い出(3)

2 回目の大学院入試になんと「トップ」で合格できた。下宿のおばちゃんが感激して、また涙したのが忘れられない。

1973 年 4 月に晴れて正規の院生となり、「もぐりの浪人時代」を抜け出した。大阪市大経営学研究科修士課程(今でいう博士前期課程)に在籍して、研究を進めて修士論文を執筆した。写真はこれも今年 1 月に撮った大阪市大本館であり、この右隣に研究棟があった。大学院時代の研究生活については、「最終講義」でも簡単に述べたので、再び生活面での話に戻ろう。

次の写真は最近の JR 阪和線の我孫子町駅である。大阪市大のある杉本町から一つ天王寺よりの駅である。昔は現在のような高架ではなく、小さな駅舎で「開かずの踏切」があった。

今でも思い出すのが、駅員さんが独特の調子で「あびこちょう」と案内していたことだ。これを物まねしたところ、日頃めったに褒めてくれない宮本先生から「お褒めの言葉」をもらったことが忘れられない。大学院時代の「宴会芸」としては、郡上節などがあるが、この「駅員物まね」も晩年には受けた。我孫子町のほかにも、「すぎもとちょう」「びしょうえん」「つるはし」なども、ここでは再現できないが好評であった。
でも、「もう、えんかい」といった声も聞こえてきた気がする。

なぜ我孫子町か。これには深いわけがある。修士課程を経て、博士課程に無事に進学できたあと、「想定外」の？結婚をした。修士論文の作成から、結婚に至るこの間の過程を説明し出すと、レポートが前に進まなくなってしまう。来年秋には、結婚 40 年周年？を迎えるので、この話題はそれまでとっておこう。「もう、けっこう？」という声が出てくるかもしれないが。

それまでの「お楽しみ」では申し訳ないので、「最終講義」でもお見せした右の写真だけでも説明しておきたい。我孫子町駅から徒歩 1 分の「中川マンション」である。この 2 階が新婚時代の懐かしき「スイートルーム」である。1 月に行ったら、イタリアンレストランに変身しており、びっくりした。当時は「八百」という中華料理屋さんであった。

中華料理の臭い、フライパンの音のなかで、新婚生活を味わった。これは「うそ八百」ではない。今回はいつもの冷静さに欠け、つい「調子」がハイになっているようだ。これ以上、ハイにならないように、大学時代の思い出をとりあえず「打ち止め終了」にしておこう。またの機会をお楽しみに。　　(2014 年 8 月 24 日)